

## 「ブラウン管のなかの外国人たち」

ブルース・L・バートン

2000.12.12 放送

今回は、日本のテレビ番組をとおしてみられる外国人像について考えてみたいと思います。テレビに出る外国人の一人として、個人的にも大変身近なテーマですが、視聴者の皆さまにとっても、逆に日本人自身の感覚や態度をあらためてみつめる機会となれば幸いです。

そういうわけで、今日のテーマは、日本のテレビに写る外国人の姿ですが、「テレビ番組」と一口に言ってももちろんいろいろあります。ニュースやドキュメンタリーなど、視聴者に客観的な情報を与えようとするものもあれば、ドラマや、お笑い番組、音楽番組など、単純にエンターテインメントを目的としたものもあります。また、民間放送のCMに登場する外国人の存在も無視することはできません。従って、本来なら、こうしたジャンルごとに考察すべきだと思いますが、ここでは時間の制限もありますので、総体的に考えていきたいと思います。

では、日本のテレビでは、外国や外国人はどのように描かれているのでしょうか。まず注目したいのは、テレビにおける外国人の割合が極めて大きい、ということです。外国人の登場がもっとも多いのはCMですが、もちろん普通の番組にもよく出演しています。正確な数字を出すのは難しいのですが、たとえば、この「視点・論点」という番組では、毎回違う人が出て話す仕組みになっています。そして一月単位で見ると、20数名いる出演者のうち、私のような外国人が必ず一人か二人入っています。またトーク・ショーやクイズ番組などでも外国人タレントがよく見られます。

これは日本人が外国や外国人に対してそれだけ関心を持っている、ということを示していると言えるでしょう。そしてこのことは、外国人タレントの数の多さからだけでなく、外国に関する番組の多さからも伺われます。

日本は資源の少ない島国であるため、昔より海外の動向に注意を払う状況が<sup>培</sup>われてきました。テレビを見ると、そうした必然性から生まれた海外への関心の強さは今でも健在だと言えます。今後も、国際化やグローバル化が進んでいく状況のなかで、海外や外国人に関心を持つということは、日本の強みとなることでしょう。

ところが、日本に住んでいる外国人として、関心を持たれるのは非常にありがたいことなのですが、残念ながらその関心の内容や表現にはしばしば不健全な偏りが見られるように思います。ここでまず取り上げたいのは、いわゆるステレオタイプの問題です。と言うのも、日本のテレビ番組が外国や外国人に対する固定観念や偏見に<sup>縛</sup>りをかけていることがしばしばあると思われるからです。

たとえば、具体的な番組名を言えないので若干説明しにくいのですが、日本のクイズ番組などで、発展途上国の山奥に入り、そこに住んでいる部族の人たちを取材し、その生活

習慣を取り上げることがよくあります。ドキュメンタリー的なアプローチでしたら、何の問題もないと思われそうですが、そうではなく、半分視聴者を笑わせる目的で、日本人の目からすれば奇妙な習慣ばかりを選んで紹介する傾向が比較的に強いように思われます。見方を変えれば、こうした取材の仕方は、相手の文化を半分バカにしていることにはならないでしょうか。紹介すること自体はとてもいい試みだと思いますが、相手の文化や習慣に対する違和感ではなく、むしろ共感や理解を促すような番組づくりが本来健全ではないでしょうか。

こうしたステレオタイプ的な見方は、途上国に対してだけではなく、欧米出身の外国人に対しても見られます。これもほんの一例ですが、お笑い系の番組で日本人タレントが白人の格好を装って出ることがよくあります。視聴者の皆さまもご覧になったことがあると思いますが、日本人タレントが金髪のカツラをかぶったり、異常に高い作り物の鼻を顔に付けたり、外国人の真似をしてたどたどしく日本語をしゃべったりします。タレント自身に悪意があるとは思いませんが、こうした物まねは、品位に欠けるだけではなく、考え方によっては、人権侵害に触れるかもしれません。

視聴者の皆さまは、例えば、外国に行って、日本人の身振りを題材にしたコメディーをご覧になったら、どのような気持ちになるのでしょうか。おそらく気分を害するに違いないだろうと思います。我々外国人も日本のテレビで平然と行われている、このような番組を見るたびに同じような気持ちになります。そして是非改善を検討してもらいたいと感じます。

このように、日本のテレビ局は、外国人に対してステレオタイプ的な描き方をすることがよくありますが、これに関連してもう一つ言いたいのは、「外国人」と一口に言っても、出身国や人種によって扱い方がかなり違う、ということです。

アメリカ人の私が言うのはおかしいかもしれませんが、日本のテレビで見る外国人のなかに、欧米出身者の割合が少し高すぎるのではないのでしょうか。欧米人の出演がもっとも多いのは、番組より CM のほうだと思いますが、この傾向は程度の差はあれ、普通の番組にも見られます。つまり日本では、外国人といえば欧米人というステレオタイプをテレビ放送を媒介して促しているような気がします。

実際には日本にいる外国人の数から言うと、欧米系の人のごくわずかで、アジアその他の地域から来ている人が圧倒的に多いと言えます。もしそうだとすると、アジア系の外国人がたくさんテレビで活躍していてもちっともおかしくないのですが、なぜかその姿があまり見えてきません。日本の芸能界には在日韓国人が比較的に多いと聞きますが、外国籍を売り物にするどころか、それを隠し日本名を通称にしていたりします。それは日本人になるほうが何か大きなメリットがあるからに違いありません。欧米出身の人たちとは大違いです。

出演者の出身国ではなく番組の内容に関して言えば、最近、アジア諸国の観光地や料理などを紹介する番組がかなり増えてきています。しかしそれでもテレビ番組全体を見ると、

欧米を特集する番組のほうが依然として大きな割合を占めているように思えます。

ここで指摘してきた問題点はいずれも、テレビそのものというより、日本社会のあり方に起因していると言うまでもありません。日本社会に、外国人をステレオタイプでくくる人が多く、人種や出身国による差別が実際存在するからこそ、社会の鏡であるテレビにその問題が映しだされるのだと思います。

たとえば、欧米人を優遇し、その他の外国人に対して閉鎖的な態度をとるというのは、日本社会で広く見られる傾向ではないでしょうか。こうした待遇の違いは、最終的に日本と諸外国との歴史的関係に起因しているものだと思いますが、根強い問題だけに、テレビ放送のありかたにもその影響が見られることでしょう。

しかしテレビは、視聴率をあげるためにただ放送すればいいというものではなく、何か社会的な問題があれば、それを指摘し、視聴者に対して教育的役割も担っていると私は思います。日本に住んでいる外国人の一人として、もう少し公平に偏見なく、テレビのなかで外国人を扱うことを強く希望する次第でございます。

では。